

No. 75 2016 年

日彫会報

公益社団法人
日本彫刻会

事務所 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-29-18 レジョン・ド・諏訪202号室

TEL 03(3209)1861 FAX 03(3232)0557

<http://www.niccho.com/> email: jimu@niccho.com

— 造形言語による個々の主張 —



第46回日本彫刻会展覧会 「彫刻研究会」の様子

理事長就任のご挨拶

日本彫刻会理事長

神戸 峰 男



この度、平成二十八年・二十九年度の二年間、理事長を仰せつかりました。美濃の奥山で暮らし、四十雀の巢立ちに一喜一憂しているような愚生に、この大役が全うできるのか、甚だ疑わしいところではありますが、幸いにも有能な会務委員諸兄に恵まれ新体制が発足しました。会員の皆様を始め、関係各位のご協力とご指導を賜りながら任に当って参りたいと思っております。

新世紀に入っのネット革命は益々拍車が掛かり、グローバル的価値観と、その共有化が極端に進む一方、これが同じ時代かと目を疑うような強烈なるナシヨナリズムや、テロリズムが台頭するなど、世界が尋常でない状況を迎えております。「この社会状況がもたらす人々の生活の変化に、我々彫刻家はどのように応じていくべきか」「彫刻とは、造形表現とは」。これらの問いに答えは出てきません。各々がひたむきに彫刻を造り続けることで、いつか我々の仕事「造形言語」として表現され、解答に繋がるであろうと信ずるよりありません。

いわずもがなですが、美術界における日本彫刻会の立ち位置は、本会に参加する作家の彫刻観と志向によって決定づけられます。大切なことは個々の自己主張です。この強い主張の集積が日彫展のパワーとなり、渦巻き輝くことを期待いたします。

今後とも会員各位の活躍の場を更に充実させるため、役員一同、持続可能な機構の構築に最大限尽力させていただく所存です。皆様のご支援をお願い申し上げます、理事長就任のご挨拶いたします。

委員長就任のご挨拶

日本彫刻会委員長

宮 瀬 富 之



私が日彫会に入会させて頂いてから半世紀近くになります。その間、先達の諸先生方をはじめ先輩・多くの友人から作品制作についてのアドバイスや心温かい叱咤激励を頂きました。今日まで共に制作を続けてこられた事、大変有難く、感謝の念に絶えません。

さてこの度、理事長・神戸峰男先生より、先生方が永々と築いてこられた歴史あるページを捲る為、私に委員長を…との御話がありました。長時間に及ぶ御説明と御説得の中、先生の御熱意に頭の下ル思いがいたしました。理由あって、私の名前を使って頂く程度の御役目しか果たせない由、申し上げた上で承諾致しました。いつしか年齢を経て、私自身、非才ながら日彫会に何らかの形で御役に立つことができれば…と平常常々思っていたのですが、体調の不備あって体の自由がきかないという現況です。このような状況で、理事長の意にそぐうお手伝いが可能なのか、役割を果していけるのか不安でいっぱいです。是非、会員の皆様方の御理解とご協力、御支援を頂き、私なりにできることを精一杯させていただきたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

さて私の好きな言葉の中に、方丈記（鴨長明）の一節、
「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。
よどみに浮かぶ、うたかたはかつ消えかつ結びて、
久しくとどまりたる例なし。」があります。

「無常」常のないこと。定まりのないこと。つまりこの世の中は同じように見えているようだが、絶えず動いているという意味だそうです。時間のもとに戻りはしない。新しい時代の流れの中で新しい息吹を感じさせ、新しい作品制作を目指す。そのような時空間を常に持ち続けたいと願っている私です。自分自身の不自由さにつきあいながらも妥協せず、制作努力は惜みません。

平成28年度日本彫刻会総会

第87回通常総会報告

平成28年1月23日(土)午後2時より日展会館において第87回通常総会が開催されました。

出席者 正会員 215名(内委任状167名)

定款17条の定めるところにより総会成立

議事

第一号議案 平成27年度 事業報告承認の件

第二号議案 平成27年度 決算報告承認の件・

監査報告

第三号議案 第46回日彫展開催に関する件

第四号議案 会員資格喪失の件

第五号議案 会員状況承認の件

第六号議案 役員改選の件

全議案とも異議なく承認されました。

報告

一 平成28年度 事業計画案の報告

二 平成28年度 予算案の報告

三 委員改選の報告

理事長 神戸峰男

委員長 宮瀬富之

会務委員(10名)

庶務部 柴田良貴 吉岡徹 寺山三佳

宮坂慎司

企画部 清家悟 間島博徳 森矢真人

武本大志

会計部 川崎義昭 長谷川倫子

出版・広報委員(6名)

西村祐一 中原篤徳 永江智尚

一 欽田徹 田丸稔 三政洋一

四 新運営委員および新無審査会員の報告

五 第46回日彫展審査員の報告

六 第46回日彫展会友推挙選考委員の報告

七 第10回日本彫刻会新鋭選抜展準備状況の報告

八 平成29年度以降の日彫展会場確保の報告

九 その他の報告

高齢者会員祝賀

満90歳を迎えた正会員の齋藤二郎氏に、賀詞と記念品を贈呈する報告がありました。

総会終了後、懇親パーティの席上で花束贈呈

による新旧理事長の交代が行われました。

第46回日本彫刻会展覧会報告

公益社団法人 日本彫刻会は、昭和22年「日本彫刻家連盟」としての発足以来、69年の歴史を持つ国内最大の彫刻研究団体です。

本会は活動の中心事業として、日彫展と冠する公募展を開催しております。日彫展では彫刻作品の展示のほかに、「彫刻研究会」「ギャラリートーク」日彫友の会における「タッチツアー」「触れる彫刻鑑賞支援活動」などの活動を通して、作家の彫刻芸術の研鑽のほか、芸術文化の振興と社会への貢献に努めています。

本年も上野の東京都美術館を会場とし、第46回日彫展を開催いたしました。そのほか、本会は地

方日彫展・各種選抜展などを開催しております。第46回日彫展の詳細は以下の通りです。

①会期 平成28年4月19日(火)

4月30日(土)

②会場 東京都美術館

ギャラリア・A・B・C

(東京都台東区上野公園8-36)

③陳列点数

314点

〈内訳〉

正会員 244点

会友 35点

遺作 2点

無鑑査(一般応募) 3点

鑑査(一般応募) 30点

④審査員

審査員長 神戸峰男

宮瀬富之 片山博詞 櫻井真理

新澤博志 大丸 敏 中原篤徳

野村光雄 堀龍太郎 榎野仁一

村井良樹 伊庭照美 中口一也

廣川政和 二塚佳永子

(以上15名)

西望賞審査員

守屋正彦 筑波大学教授・博士

(芸術学)

⑤会友推挙選考委員

榎野仁一 大丸 敏 堀龍太郎

村井良樹

(以上4名)

⑥受賞者

西望賞 清家 悟

日彫賞 境野里香 村上佑介 森田一成

優秀賞 岡本和弘 桑原秀栄 城谷なるみ

田村晴江 仲 正彦

新人賞 秋田美鈴 石崎義弘 緒方信行

橋本拓也 服部真知

(受賞者の声は5～9ページに掲載)

⑦会友推挙・正会員推挙

会友推挙

秋田美鈴 飯島聡恵 奥平陽和

金田登夢子 川向京子 田中敬一

富重郁子 橋本拓也 細川忠夫

安田有孝 若杉信一

(以上11名)

正会員推挙

石井沙知 石崎義弘 岩崎清

上松真弥 大河内正敏 緒方信行

津田真吾 (以上7名)



会場風景 ギャラリーB



会場風景 ギャラリーA



会場風景 ギャラリーC

⑧入場者数

(内訳)

一般 187名

学生 19名(小学生含む)

団体 5名

招待状 5,557名

招待券 850名

出品者 1,268名

身体障がい者手帳をお持ちの方138名

付添者66名

70歳以上、子供 299名

日本美術家連盟他 84名

⑨彫刻研究会

4月23日(土)

受賞作品を中心とした作品批評、研究会を実施しました。

参加者 約150名

(詳細は10ページに掲載)

⑩作家が語る鑑賞会(ギャラリートーク)

期間中毎日(4月23日、30日を除く)

通算参加者 約223名

(詳細は9ページに掲載)

⑪触れる彫刻鑑賞支援活動

a、視覚に障がいのある方のタッチツアー
希望者の申し込みにより実施しました。

通算参加者17名

b、盲学校鑑賞教室



表彰式及び
オープニングパーティー
(写真は澤村祐司様による余興の様子)

⑫表彰式及びオープニングパーティー

4月23日(土)
会場 東天紅上野店 鳳凰
(東京都台東区上野池之端1-4-1)
午後5時より

(詳細は11ページに掲載)

4月22日(金)
東京都立葛飾盲学校
中学生4名 教員3名
筑波大学附属視覚特別支援学校
高校生17名 教員6名
4月27日(水)
千葉県立千葉盲学校
中学生15名 教員10名
4月28日(木)
東京都立久我山青光学園
小学生17名 教員10名

◆受賞者の声

□西望賞「青空」 清家 悟



私の制作はいつも裸婦との対話の様だ。意図して制作することもあるけれど、本当の制作は、裸婦の前に、無心に見ることに専念する時だ。生命を宿した形の表われるまで、ひたすら見る。そして問いかける。生命を宿した彫刻はどの様であるかと。そうやってずっと制作して来た。これからも変わらずその様に制作してゆきたいと思う。生命を宿した作品に出会える迄！

□日彫賞「ないしょばなし」 境野 里香



私は、日常の一部を切り取った様な作品を作りたいと思い制作しています。そんな作品を、見た方が、共感してくださると嬉しいです。その様な想いで作った作品が荣誉ある日彫賞を受賞できました。事は、とても嬉しく思っております。作品を出品する度に、もっとこうすれば良かった等、毎回思っています。今後も、少しずつでも自信のある作品を出していきたい、がんばっていききたいと想います。

□日彫賞「そしてまた夢を見る」

村上 佑介



この度は、このような名誉ある賞をいただきましたこと、大変光栄に存じます。この像は、夢と現実の狭間にいる状態を表しています。様々な事象が夢の中の出来事に過ぎないのか、それとも現実なのか。そういった狭間の曖昧さを、具現化することに挑戦した作品です。今後も、この賞に恥じることはないよう、そして自らが目指す彫刻に近づけるように、日々精進して参ります。

□日彫賞「想」森田 一成



この度、私の作品が日彫賞という名誉ある賞に選ばれたということ、心から嬉しく思うとともに感謝の気持ちでいっぱいです。

まだ作品の制作スペースと生活環境の整っていない中での制作だったので、実際はあまり時間の掛けた仕事はできていませんでした。それでも私の作品を選んでいただけたことは、今後の私自身にとって大きな励みとなりました。

これからも頑張っていきます。本当にありがとうございます。

□優秀賞「いままでも、そしてこれからも。」

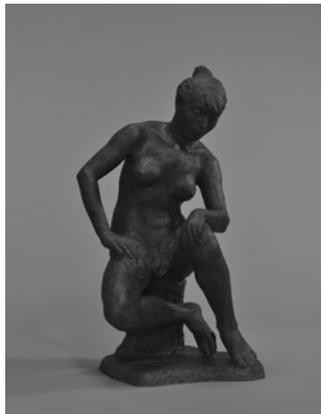
桑原 秀栄



彫刻を始めて三十年が過ぎました。その間制作の楽しさや喜び、厳しい事も沢山ありました。彫刻で一番難しいのは『続ける事』なのかもしれません。これが今作の表現意図です。今回、優秀賞を頂いた事に深く感謝し、励みになりたいと思います。未熟ではありますが今後も精進して参ります。本当にありがとうございます。

□優秀賞「控えの間」

城谷 なるみ



見飽きないような作品を作る事が夢です。ずっと学ばせていただいております日彫展にて、思いがけず賞をいただいた事は身に余る光栄です。

今回は、出番を待つ者の、揺れ動く内面の一端を座像にて表現できないものかと思ひ、制作しました。

例年より時間がなく、大づかみな外形を大切にしようと思ひました。

□優秀賞「朧げな午後は静かに流れる」岡本 和弘



今回の作品制作にあたり、普段の製作手順を若干変えて製作にあたった。手順を変える事なるべく手癖を出さない様努めた。知らず知らずのうちにポーズが違うだけで内容が同じという事になりがちなので変化を恐れず製作していきたい。賞を戴ける事はその心持を維持する事の後押ししてくれる様で心強く感じ、賞に恥じない良い仕事をして行きたい。

□優秀賞「ノクターン2016」

田村 晴江



私は音楽が好きで、日頃からコンサー
ト、レコードやCD等で楽しんでいます。
今回の作品「ノクターン 2016」は、
いつも聴いているショパンのピアノ曲
「ノクターン（夜想曲）」を彫刻にすると
どうなるか・・・と考え、モデルの協力
を得て制作してみました。

ショパンのノクターンは小品で、そ
の中から特に第20番（遺作）から感じた
「短調の暗く哀しげなメロディーが、後
に軽やかなリズムに乗って希望の光が見
える」ような。「脱力感や無力感の中に、
穏やかなしつかりした豊かさ」が表現で
きていれば良いのですが・・・ショパン
から連想した作品は今回が3作目、思い
がけず賞を頂き感激しております。こ
れからも折にふれ音楽との融和を目指し
た作品作りを追及してまいりたいと思
っています。

□優秀賞「彼方へ」仲 正彦



今回の作品は、現代の世に不安や疑問、
そして悩みをもちながらも、未来へ強い
希望をもって生きようとする姿を若い女
性で表現してみました。ここ数年は、作
品が思い通りにはいかず反省することが
多々ありました。

この度、優秀賞を頂き、喜びと感謝で
いっぱいです。ありがとうございます。
今まで以上に精進し制作に励みたいと思
います。

□新人賞「覚悟」石崎 義弘



この度は、出品の機会をいただき本当
にありがとうございます。今まで、ス
ケジュール的にも厳しいと思っていまし
たが、実際その通りでした。しかし、賞
をいただき、先生方からも多くのあたた
かい声をかけていただきました。会への
貢献も含めて、しっかりと彫刻と向き合っ
ていこうという思いを新たにすることが
できました。

□新人賞「possing」秋田 美鈴



彫刻を始めて5年目になりました。

日彫展においては初出品より続けて大変良い評価
を頂戴してまいりましたが、本当の意味で私がそれ
に値し得るかどうかが、これからの制作で応えてい
かなければならないものと考えております。いつまで
も素直に、こつこつと続けていきます。どうかご指
導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

□ 新人賞 「緑炎」 緒方 信行



明治期からの彫刻家に発する由緒ある日彫会、以前より興味をもっておりました。

この度は出品できました上に「新人賞」も頂き有難く存じます。出品作《緑炎》は「自分の意志では、どうしようもない何かに揺らぎながらも、情熱を燃やそうとする人間の存在」がテーマです。折しも熊本地震が発生し、授賞式にもやっと参加でき、自分にとっては特別な出品となりました。

日彫会の名に恥じないよう今後も彫刻道に精進したいと存じます。何卒よろしくお願いいたします。

□ 新人賞 「何が・・・見える。」

橋本 拓也



私自身が鏡の前で自分をみつめて立っております。

自分自身に何が見える？（過去、現在、未来と）と問いかけると同時に、鑑賞していただいている方々にも、何が見えますか、見えてきますか、見えていますか、と問いかけられるような、見ていただく方々をまきこめるようなものを創りたかったので、このようなカタチになりました。あくまでもしっかりと彫刻ありきで、カンペキすぎず、見ている人々と同じ視線で・・・。伝えたいことをしっかりと伝えていきたいと思っております。

□ 新人賞 「力士像」 服部 真知



この作品は大学の卒業制作です。今まで私は女性の人体像しかつくったことがなかったので、卒業制作では大きな男性をつくらうと考えていました。そんな思いに一番しっくりきたのが力士でした。

生で取組を観戦した際、あまりの迫力に感動しました。力士の持つ力強さを作品に表すことができればいいなと思いつきながら制作しました。思い切り粘土をつけて、大きくヘラを動かして、つくることを楽しみながら制作することができました。

◇ 彫刻研究会

日彫展、恒例の企画となってきました「彫刻研究会」が、第46回日彫展においても4月23日（土）午後1時から、展覧会会場である東京都美術館ギャラリーA・B・Cにて開催されました。

会場には西望賞・日彫賞・優秀賞・新人賞のそれぞれの受賞者と審査員の先生方、本会の会員・会友、入選者の方々、また一般鑑賞者の方々が集い、森矢真人、武本大志企画委員の司会のもと総勢150名余が参加する研究会が開会しました。

審査員長を務められた神戸峰男理事長は冒頭の挨拶を述べられるとともに「一般的に、こうした批評会は受賞作品の良いところしか言わないのが通例だが、悪いと思うところも指摘して、実りある研究会にしたい」と研究会の方向性を示され、ほど良い緊張感が漂うなか、批評会を中心とした研究会がスタートを切りました。

西望賞から順に、受賞作品の批評会が進む中で、時に審査員の先生は「なぜ、ここはこうしたのか？」といった高度に専門的な質問を受賞者に投げかけられ、それに対して受賞者が制作意図を語る場面が見受けられました。このように審査をされた先生の審査眼と受賞された作家の作品に対する想い、考えが交差し、彫刻に対する考え方を一般鑑賞者の方も含めて共有していく、彫刻研究会ならではのダイレクトなやりとりが繰り広げられました。

参加された一般鑑賞者の方からは、「普通に公募展に来て作品を鑑賞した場合、作家の名前と

作品名しか情報を知ることができないが、研究会に参加することで受賞者の人柄や作品に対する想いを知ることができて良かった」といった感想を頂きました。また、批評されたある審査員の先生は、「参加されたお客様がうなぎながらお聞きになつていたのが嬉しかったです。研究会を通してより繋がれた印象を受けました。」と述べられていました。

約90分間という長丁場でしたが、研究会の終わりにには宮瀬富之委員長より閉会の辞を頂き「大変熱心に耳を傾けて頂きありがとうございます。審査員と受賞者、お互いに緊張しながらこうした会をもてたことを嬉しく思います。これを機会に、来年に向けて更に良い作品をそれぞれが制作してまいります」との言葉で締めくくられ閉会となりました。

研究会閉会後も参加された方々と作家が談笑する様子が見受けられ、今回も彫刻を通して一般鑑賞者の方と繋がっていく充実した研究会となったようです。



批評会を中心とした彫刻研究会の様子

◆ギャラリートーク

鑑賞者の方により身近に彫刻を感じてもらうために始まりました出品作家によるギャラリートークですが、第46回展においても多くの鑑賞者の方々に彫刻芸術の魅力についてお伝えすることができました。

会場では、様々な素材、形態の作品を巡りながら、作家ならではの制作秘話や作品に込めた思いなど時にユーモアを交えながら、担当の先生方にはお話しを頂きました。鑑賞者の方々からは「会場の中ではなく、自然の中に作品を置くことを想定したらどうなるのか」「人に見せることを意識して制作をしているのか」など、ドキッとするような質問も頂き、和やかな中にも貴重な示唆やご意見を頂くことができました。作家と鑑賞者の双方のやり取りが活発に行われ、盛況であった毎日のギャラリートークでした。



ギャラリートーク風景

◇日彫友の会の活動

日彫友の会が発足し、早二年が経ちました。本会は、日彫会会員のみならず広く社会の方々とともに、視覚障がい者への彫刻鑑賞支援に取り組んでいく会です。現在は、日彫会の会員で鑑賞支援に長年取り組んできた方々と、視覚障がいのある一般の方々とで活動しています。友の会と日彫会が協働し、タッチツアーや鑑賞教室の企画、運営などを行なうことにより、彫刻鑑賞支援のますますの充実を図っています。

本年度も展覧会委員の鑑賞支援部と協働し、事前準備として、触れてみるのできる鑑賞作品の選定や、作品解説文の作成、鑑賞教室のプログラムの検討などに取り組みました。鑑賞教室当日は、視覚障がい者の手引き（移動の支援）などの必要な配慮について、当番担当の先生方へお伝えすることや、鑑賞教室に参加する子ども達に、触れて鑑賞する場合のポイントについてお話すするなど、補佐的な内容で活動しました。事後は、今回の反省点を基に、建設的な意見を集約し改善案をまとめました。

さて、今年の日彫展においても、多くの視覚障がい者が来場され、タッチツアーには十七名、鑑賞教室には五十五名、計七十名あまりの方にご高覧いただきました。これは一重に、日彫会の会員の皆様のご協力の賜物であると感じております。紙面をもちまして、心より御礼申し上げます。

以下、触れてみた鑑賞者の生の声を一部抜粋

でお伝えし、友の会の活動報告としたいと思えます。

- ・彫刻に触ったことがなかったので、とても楽しかったです。（鑑賞教室に参加した子ども）
- ・とても丁寧な作品に触れるよう導いてくださって、ありがとございました。たくさん人がいる中で、とても落ち着いて手による鑑賞ができました。（鑑賞教室参加校の先生）
- ・何回か来ている内に、同じ作家さんかなと思ってみることがある。触れることによって、マチエールの違いが分かって、作家が意識して表現しているなあとと思うこともある。（タッチツアー参加者）

- ・今回で三度目の来館です。来るたびに新しい感動と発見があります。作品に触れて解説を聞き、頭の中で作品を想像することがとても楽しいです。今回は三十作品全てに触れさせていただきました。これからも彫刻の世界に触れられる機会をいただけるとありがたいです。（タッチツアー参加者）



鑑賞教室の様子

第46回日彫東海展

会期 平成28年5月31日（火）

6月5日（日）

会場 愛知芸術文化センター

愛知県美術館ギャラリー1-8階

陳列点数 106点（内巡回作品73点）

入場者数 1,725名

中日賞 「鏡の前」 杉田 幸平

愛知県知事賞 「無心」 加藤 知彦

東海テレビ賞 「ふわり」 志満津 華子

紫陽花月に入る開幕ではありましたが、お天気にもなんとか恵まれ一七二五名の鑑賞者を迎えることができました。例年通り新聞紙上の報道により東海展も毎年鑑賞に来られる方が増え、興味や関心を持ってまた、待ち望んで来場される方が目立ちました。

タッチツアー（触れてみる鑑賞会）では、視覚障がい者、付き添い、サポーター含む十名の参加者と三時間近くまで和やかにまた、深く鋭いご意見を数々頂き盛況に終了することが出来ました。昨年頂いたお言葉（手が喜んでいる）は心に響く言葉ではありませんが、おひとりおひとりが三回から五回と毎年続けて参加される方々ばかりなので、作家と鑑賞者が「形を通して心が通い会う」素敵な瞬間にもなり、充実感溢れる時間でもありました。「今年のノミ（刃）の跡が違う。形から来る香りが良い」と作家の心に響くご感想を頂いております。



手でなで感じとり作家の説明を聴く



タッチツアー参加者と子ども達 作家の話聴く
(カメレオンの作品前で)

「心が動く、動かされる瞬間」とても気持ちりが
柔らかくなります。そしていつまでも残る感動
は心の栄養にもなります。今後も可能な限り精
神的あるいは美的な体験に繋がる活動が出来れ
ばと余韻残る閉幕でした。

(東海日彫会事務局)



子ども達と楽しく鑑賞教室ができました

ボランティアの代表の方々も、図録から作品
(タッチ可能な作品十作品)すべて言葉で説明し
たCDを今年も参加者に制作して渡されていま
す。一年に一回の展覧会を楽しみにされていらっ
しゃる参加者への想いがとても深く感じられま
す。高校生の鑑賞者も増え作家に質問している
様子を見ることが出来微笑ましくも想いました。

第46回日彫北陸展

会期 平成28年6月9日(木)

6月13日(月)

会場 富山市民プラザギャラリーA・B・C

陳列点数 94点(内巡回作品73点)

入場者数 1,356名

北陸日彫会賞 「想」 森田 一成

富山新聞社長賞 「つらら」 宇津 孝志

日彫北陸展は、長年にわたって石川と富山で
の隔年ごとの実施にしております、今年は富山市民
プラザで開催しました。富山市民プラザギャラ
リーは、一昨年も使用した会場であります。が、
展示の作品数が一昨年よりも多く、陳列委員の
工夫のあとがうかがえる会場となりました。ま
た今回は、北陸日彫会会員による作品解説会、
触れてみる彫刻の表示、親子ふれあい彫刻教室
を企画しました。



作品解説会の様子

まず、作品解説においては、開会式のあと神戸理事長が一点一点の作品について制作の背景や作者の意図、作品の構成やフォルムのあり方などを優しく分かりやすく丁寧にまた長時間にわたって解説をしていただきました。これは会員にとっても一般の鑑賞者にとっても大変有意義な時間を持たせていただいたと考えています。

また、期間中には来場者一人ひとりの要望に応じて富山会員が解説を行いました。

富山という土地柄だと思いますが、入場者の中には自身が作った木彫の作品を持ってきて批評を求める方や、木彫の作品の樹種を尋ねる方などがあり、これらの質問や要望にも親切に答えられたと考えています。

次に、親子ふれあい彫刻教室「家族で作ろう



作品解説会の様子

みんなの笑顔」と題しワークショップを実施しました。富山では一昨年の第44回展に続き二度目の企画です。事前にパンフレットを作成し、公共施設や教育機関に参加の依頼をするのと同時に友人知人への働きかけによって、一昨年に倍する参加者となりました。おばあちゃんとの参加、お母さんとの参加や友達との参加など子供たちの笑い声やにぎやかな雰囲気で作りが始められました。作品は、針金の骨組みに軽量樹脂粘土をつけて制作し完成させるものです。子供たちは、北陸日彫会会員の指導によって彫刻を制作することの面白さや楽しさを知ってくれたのではないかと思います。完成した作品には、会場の作品を手本にした作品、クマのキャラクターやバレリーナが踊っている姿を表現した作品など、子供たちの自由な発想と柔軟な感性があふれていました。子供たちからは、「作品を完成させて楽しかった」「粘土で作るのが面白かった」「バレリーナのスカートの襷を作るのが難しかった」などの感想や課題の言葉があり、会員にとっても有意義なひと時となりました。

これからもこの企画を続けることによって彫刻を作る楽しさが広がっていくことを期待しています。

(北陸日彫会富山事務局)

アトリエ訪問Ⅱ

◆早川高師会員のアトリエ訪問

のどかな田園風景が広がる愛知県刈谷市、ここに早川高師氏のアトリエがあります。空飛ぶカバや、あかんべえをする人魚など、ユーモア溢れる木彫作品が生まれる場所です。

氏は、祖父の代から続く獅子頭職人の家に生まれました。小学五年生からはノミを砥ぐこと、中学一年生からは基礎的な部分である獅子の耳や舌を彫ることに携わりました。「将来は自分も家業を継ぐのだろう」と思いながら育ち、二十四歳での結婚を期に職人として独立し、自身の住居とアトリエを構えました。現在のアトリエは、三十歳の時に、公共事業での立ち退きによって新たに建てることになった二軒目です。



獅子頭制作場



獅子頭制作場（上段）、棚の小品（下段）

アトリエの玄関から一段上がると、板間があります。壁側には、道具が整理された棚が並び、その上には氏がつくった小品が飾られています。この板間は主に、正月用の干支の置物などの小品や、獅子頭などの中品を制作する場所です。制作時はあぐらで座って、作業台の上で彫り、周りの床には、その時必要な道具や木材が並べられます。獅子頭の仕事は、秋祭りに向けて発注が増え、夏が繁忙期となり、奉納数は年間百個以上に及びます。寄木獅子頭をつくれる日本唯一の職人である氏の傍らではお弟子さんも制作にあたり、お二人の心地よい槌の音と木の香りが立ち込めます。

板間の奥は、一段下がり、コンクリート敷きの空間です。天井高が確保されており、高い位置の窓からは適度な自然光が差し込みます。また、上部の鉄骨からはチェーンブロックが下がっています。壁側には、これまで公募展に出品した作品、王様シリーズや家族シリーズ、それ以前のもが並びます。

この空間で、日彫展にも出すような大型の作品が制作されています。獅子頭制作の手が空くと、公募展用の制作をし、ある程度工程が進むと、また獅子頭の制作に戻るそうです。制作をしていると、どうしても視野が狭くなるため、一度時間をおいて寝かせ、冷静な目でもう一度作品と対峙するためだそうです。また、奥さんや娘さんが言う作品への意見は新たな見方につながるため、積極的に聞くようにして作品に活かしているそうです。



公募展用作品の制作場

この他にもアトリエには、バンドソーなどの木工機械の部屋、材木置き場、屋根裏の作品置き場などがあり、これらがあるべき位置にある造りになっています。ただし、このアトリエの形は、少しずつ変化して出来上がったものさうです。

例えば、公募展用作品の制作場は、当初は材木置ききの倉庫でした。先輩のアトリエを参考にして、壁に板を貼り、高い位置に窓を設け、制作場としての充実を図ったそうです。この他にも、獅子頭の制作スペースも増築で広くなるなど、その時々で必要な改良を重ねてきたそうです。

氏は、「このアトリエはとりわけ良いところは無いが、使いやすい」と言います。この言葉の通り、氏にとって、良い仕事をするために適した造りになっていると感じました。

アトリエに行かないのは、一年に一日だけしかないそうです。元旦の日は、年賀状の返事を書くために休むが、その他は絶えず制作に向うとのことです。今日も、氏のアトリエからは、新たな作品が生まれます。



公募展用作品の制作場

◇境野里香会員のアトリエ訪問

西武線沿線のとある駅を降り、賑やかながらも、老舗の多い商店街を歩いていくと、そこに境野里香会員のアトリエがあります。元々は店舗として作られたところで、ショーウィンドウには境野さんによる彫刻作品が展示されており、そこだけ不思議なアートな空間となっています。

境野さんは、女子美術短期大学（現在の女子美術大学短期大学部）で彫塑を専攻し、一九九二年に日彫展に初入選で奨励賞を受賞、以来、休むことなく日彫展に出品し、多くの作品を発表してきました。また、本年度は日彫賞を受賞され、新鋭選抜展をはじめ非常に充実した創作活動を行っています。



アトリエ前で



彫刻制作中の境野会員

猫と優しい女性の像、あるいは子どもの像といえ、境野さんの作品で、ご本人とは面識はなくても、作品をご存じの方は多いのではないのでしょうか。

さて、アトリエにお邪魔すると、そこは、境野さんの彫刻や造形に関するものが、境野さんにしか分からないように置かれ、彫刻だけでなく様々な造形の仕事と同時に平行して行われていることが分かります。人形やアクセサリーの原型なども多く手掛けているとのことで、工具や豊富な種類の造形材料が所狭しと置かれていますのも特徴的だといえるかもしれません。最近では五歳になるお嬢さんが制作のテーマとなることが多いようで、今



蠟型によるストラップの原型

回も愛らしい彫刻を拝見することができました。作品制作や造形の仕事の苦労といったことはあまり表に出さず、飄々と語る境野さん。しかしそこには揺るぎない創作への深い想いがありました。

猫が彫刻をよけつつゆったりと通り過ぎていくのを眺めながら、「ああここはまぎれもない彫刻家のサンクチュアリーなのだ。」そんなことを感じた、今回のアトリエ訪問でした。

東京彫刻散歩Ⅸ

《みどりのリズム》 ブロンズ 1951

清水 多嘉示^{たかし} (1897~1981)

設置場所

東京都台東区上野公園・池之端3丁目

上野恩賜公園内上野グリーンサロン前広場



H.174cm ブロンズ 1951

東京彫刻散歩も九回を数え、会報の企画の中でもお馴染みになってまいりました。今号で取り上げる作品は、日彫展開催の地である上野公園にある清水多嘉示作「みどりのリズム」です。

上野公園口から東京都美術館に向かう道すがら、国立西洋美術館のロダンやブールデルの彫刻群、大熊氏廣による小松宮彰仁親王騎馬像などを眺めることができます。しかし、「みどりのリズム」は、像は思い浮かぶものの、「上野公園のどこにあるのか多くの方がご存じないかもしれません。それもそのはず、一九五一年に設置されてから、二回の移動があり、現在は、上野グリーンサロン前広場の左側奥に設置され、彫刻の手前には売店が建てられたため、公園に向かう歩道からは、全く見えない状況にあります。周辺の環境の変化というものは野外彫刻の宿命のようなものかもしれませんが、いささか残念な状況と言わざるを得ません。

さて、「みどりのリズム」の作者である清水多嘉示は、戦前にパリでブールデルに師事、帰国後は帝国美術学校、武蔵野美術大学等で教鞭を執りながら数々の彫刻作品を制作、日本藝術院会員、本会の前身である日本彫塑会の会長を務めるなど我が国の近現代における彫刻史の中で重要な位置を占めた彫刻家です。本稿では、戦後日本における彫刻芸術の劈頭ともいえる本作品について、見ていきたいと思えます。なお、執筆にあたっては、清水多嘉示のご息女(三女)である青山敏子氏に取材をさせて頂きました。

本作品は、サンフランシスコ講和条約締結を

記念して、一九五一年に上野公園広小路大階段下の緑地帯に設置されました。作品はコンペで十四名の応募者の中から選ばれました。清水の作品の選出理由は、「敗戦後六年、日本、そして首都東京の再建と平和な未来を象徴する記念碑として相応しく、親しみやすく、清純で愛らしく澆刺とした作品である。」とのことで、新生日本を象徴する彫刻作品として盛大に除幕式が挙行されました。

像容は、二人の少女が手を取り合いながら輪舞するようなブロンズ製の群像で、増高は一七四cmの等身大の彫刻です。師であるブールデル譲りの綿密な構築性を持って人体を表現しつつ、軽快さと情緒を失わない清水の作品は、その当時から高く評価されていました。

彫刻評論の泰斗であった中村傳三郎(1916~1994)は一九八一年に『三彩』の中で、本作品を振り返り、次のように述べています。「ところでこの「みどりのリズム」は。戦後まもない時代の清水芸術を代表する傑作なのである。(中略) この像はこれらのなかでも費用のかかる実材(ブロンズ)像として本格的に建てられるのは未だめざらしく早い時期の、しかも再建日本の希望を示す一典型例となっている。そればかりか現在こんなに盛んに建てられるようになった現代日本の屋外モニュマンのうちで最高に評価できるのはやはりこの「みどりのリズム」だと私は信じている。」

敏子氏は、本作品制作時は、小学校一年生だったそうですが、清水は当初、次女とその友人を

モデルにひな形を制作し、コンペ決定後、バレエのレッスンを受けている高校生をモデルにして、かなりのスピードで本作品を完成させたそうです。制作を急いだのは、コンペ決定から本作品提出期限まで日数が短かったためと伺いました。

敏子氏によれば、父親としての清水は大変ユーモアがあり、家の中は常に笑いが絶えなかったとのこと。また、幼い敏子氏がアトリエの清水の傍らで粘土のドーナツを作って遊んでもニコニコとしていたそうで、肉親ならではお話を伺うことができませんでした。一九二三年から一九二八年までのフランス留学では、ブルデルの厚い信頼を得る誠実な仕事ぶりに加え、パリの文化を吸収すべくオペラ、バレエ、映画、

コンサート、ダンス等、舞台芸術に親しんだ通人としての側面もあったとのこと。フランス仕込みのエスプリは帰国後も変わらなかったようです。

清水自身も代表作として気に入っていたという「みどりのリズム」ですが、先にも述べましたように、現在、ひっそりと上野公園に佇んでいます。戦禍の残る昭和二十年代半ばから都市の自由な空気を象徴し、長きにわたり、明るい希望と夢を人々に与えたこの作品を、今一度、しっかりと見つめたいものです。末尾となりましたが、今回、取材をさせて頂き、数々の貴重な資料とご教示を頂きました青山敏子氏に深甚なる感謝を申し上げます。
※一部敬称を略させて頂きました。



像の除幕式にて
父・清水と敏子氏（中央の女の子）

〈 散歩のご案内 〉
～ 最寄駅 ～

JR・地下鉄銀座線・日比谷線「上野」下車徒歩2分
大江戸線「上野御徒町」下車徒歩5分
京成線「京成上野」下車徒歩1分 駐車場（有料）

◇ 第10回日本彫刻会新鋭選抜展「造楽」

平成8年に、新人の発掘および育成を目的として始まった新鋭選抜展は、このたび第10回の節目を迎えました。本展でも、日彫会で今後を期待される若手作家25名が選ばれ、各々が今できる最大限の仕事に取り組み、その成果が銀座の街に展示されました。

会期 平成28年6月5日(日)～6月18日(土)

11時から19時まで(最終日16時まで)

会場 美術家会館1階 ギャラリー青羅

東京都中央区銀座3-10-19

出品者 上松真弥 岡本和弘 加山総子

桑原秀栄 小西徳泉 小橋暁子

境野里香 志満津華子 白石恵里

鈴木紹陶武 高野眞吾 武本大志

田村さつき 時田直彦 永江智尚

丹羽俊揮 長谷川倫子 細川大潤

間島博徳 宮坂慎司 村上佑介

森矢真人 安田陽子 山本将之

横山丈樹 (以上25名)



本展のサブタイトル「造楽」は、出品者の思いがこもった造語です。若手作家が造形活動を続けるためには、場所や時間の確保など多くの困難がつきものですが、それぞれの状況のもと、造ることに楽しみや喜びを感じ邁進しています。このように、造り手が造形を楽しむこと、さらに、ご来場の方々には造形作品の鑑賞を楽しんでいただきたいという思いを込め、「造楽」としました。

会場には出品者各々の意気込みが感じられるものばかりが並びました。日彫展に出品している大型の作品を中品サイズに凝縮した仕事、天井から作品を吊るなど展示会場の特徴を意識した仕事、これまでの作品とは異なる素材や着色に挑戦した仕事、中品サイズだからこそできる表現を模索した仕事、どの仕事も興味深く変化に富んだ展示となりました。



新鋭選抜展 会場風景

展覧会の初日には、神戸峰男理事長をはじめ、遠方からも多くの先生や出版業界の方がご参加くださり、作品を語る会（オープンングパーティー）が開かれました。出品者が制作の動機や経緯、作品への思いなどを述べた後、一人ひとりに対して来場の先生方からの講評がありました。講評の内容は、色と造形との関連について、作品を活かす台座の選定について、比例均衡や構築性といった造形要素について、鉛直方向の重心の取り方についてなど、どれも若手作家にとって学ぶべき彫刻の本質的なお話でした。これから、表現の在り方について見つめ直し、次の一歩を踏み出せる彫刻談義となりました。



作品を語る会の様子

平成28年5月4日～5月27日まで、全国の主要な公募団体からそれぞれ選出された作家による「公募団体ベストセレクション美術2016」が、東京都美術館にて開催されました。本展覧会は、「公募展発祥の地」である同館の企画展として、平成二十四年から始まり今回で五回目を迎えるものです。

二十七の美術公募団体から、総勢一五一人に及ぶ作家が旬の作家として選ばれ、日本画、洋画、彫刻、版画、水彩画、工芸といった、各公募団体の特徴である表現領域によって制作された作品が一堂に会し、本会からは、寺山三佳氏、小宮山美貴氏、森矢真人氏、武本大志氏の四人の会員が出品されました。

慶 事

正会員 山田 朝彦 先生

第72回日本芸術院賞受賞

改組 新 第2回日展出品作

『朝の響き』 平成28年3月

正会員 柴田 良貴 先生

文部科学大臣賞受賞

改組 新 第2回日展出品作

『夕暮れの立像』 平成27年10月

公募団体ベストセレクション 美術 2016



アーティストトークの様子

会期中に行われた「アーティストトーク」には、寺山三佳氏が自作の説明や公益社団法人日本彫刻会の紹介を行いました。

寺山氏に当日の様子をうかがいました。「アーティストトーク」は、二十分程度の持ち時間で各作家がジャンル、所属団体を問わずリレー式に作品や制作について解説を行いました。参加者は作品のテーマや表現方法に耳を傾けてくれましたが、一般の鑑賞者には馴染みのない彫刻は素材や制作方法、制作時間、着色など疑問なことが多くあったようで、様々な質問を受けることになりました。どの質問も基本的な質問でしたが制作時には特に意識していないことばかりで、制作の基本に立ち返ることができました」と述べられていました。

寺山氏以外の本会会員の先生方もそれぞれ大作出品され、各公募展における作家の作品を横断的に鑑賞できる同展会場を彩られておりました。



会場風景

訃報

左記の方が長逝されました。謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

正会員 關ゆかり先生

平成二十七年十一月

正会員 鈴木次男先生

平成二十八年一月

正会員 渡部信子先生

平成二十八年二月

正会員 石田光男先生

平成二十八年六月

会友 岡俊三先生

平成二十八年六月

編集後記

◆先の熊本地震で被災されました皆様方には心からお見舞い申し上げます。復興半ばかと思いますが、一日も早く普段の生活を取り戻せますようお祈りいたしております。

◆世界各地からも災害やテロのニュースが聞かれます。一方で人工知能やロボットの開発、また3Dプリンターの出現など、物づくりの原点あるいはその意義を問いただされているように感じます。

◆編集にあたりましてご協力頂きました先生方、東京都美術館の皆様、また快く取材に応じて頂きました青山敏子様はこの場をお借りして心から御礼を申し上げます。

◆今回号より新委員での出発となりました。受賞者の方からの声をお寄せ頂き、アトリエ訪問では早川高師会員、境野里香会員をお尋ねしました。今後ともより充実した内容で皆様に情報を提供し、また紙面を通じて会員相互の交流も図りたいと思います。皆様がたのご意見やご要望がございましたらどうぞお寄せください

編集委員 西村 祐一 中原 篤徳 永江 智尚

一 鍛田 徹 田丸 稔 三政 洋一

日彫会報 No.75 平成28年8月17日発行